

現地レポート 07

# 沈下橋建設と暮らしの変化

ミャンマー連邦共和国 マグウェ地域、タイエツ地区

建設省地方道路開発局事務所（DRRD）／高等技術専門学校（GTI）

終業間近、建設省地方道路開発局（以下 DRRD）の事務所を訪問する。短い時間ではあったが話を聞かせてもらった。同局では橋よりも道路の建設に携わることが多いそうだ。

エンジニアの Daw Lai Lai Win と Daw May Zin That の 2 人は沈下橋の建築作業を見ておらず、完成後の橋を見に行っていたことがあるということだった。コンテナなどを載せた大型車両は通れないが、堅固な作りだと感じたそうだ。また、エンジニアから見てもシンプルな構造の橋で、予算少なく村の発展に貢献できるので、もっと建設すべきだと思うという声が聞かれた。

マグウェ地域タイエツ県タイエツ市にある高等技術専門学校（GTI）は 2010 年 10 月に開校された。約 40 エーカーの校内で、教師 57 名が 630 名の学生に教鞭をとっている。

同校は 3 年制で、土木工学、電子工学、電気工学、機械工学を学ぶことができる。人気の学科は土木工学。就職に有利と考える親がすすめるのだそうだ。

2019 年 3 月、同校の教室を借り、JIP 主催で技術移転のためのワークショップを 2 日間開催した経緯がある。学長は教室を提供するだけでなく、ぜひとも学生たちにも学びの機会を与えて欲しいと提案し、土木工学を学ぶ 3 年生 40 名も参加することになった。

執筆・撮影者紹介

兵頭千夏さん

ヤンゴンを拠点に、ミャンマーの人々の生活・伝統文化・信仰・女性をメインテーマに撮影している写真家。2003 年よりヤンゴン文化大学に 2 年間留学し、ミャンマー語の通訳者、翻訳者としても幅広く活躍しています。

今回、JIP の沈下橋建設事業がミャンマーの人々の暮らしをどのように変えたのか、現地の撮影や住民へのインタビューを通して、レポートをしていただきました。



DRRD 職員の皆さん

Dr. Kyaw San Win 学長は「学生にはまだまだ知識が必要なんです。このような生きた学びの場をこちらはもっと受け入れたいのです。沈下橋は地域にとって意義ある事業ですから関心を持っています。ワークショップや講演など、今後もおこなって欲しいです」と大歓迎であった。ワークショップは沈下橋の技術移転を目的とするもので、政府関係機関職員たちを対象におこなっていた。学生たちにとって、図らずも現役で働くエンジニアと知り合う機会にもなり、就職に繋がる可能性が出来たと学長は喜んでいました。

その後、ワークショップに参加した学生と教師は沈下橋の建築現場へ見学に行ったそうだ。これまでは3D や設計図面でしか学んでこなかったが実際の仕事ぶりを目の当たりにし、どのような作業をするのか知ることができ、とても勉強になったと学生たちは言っていたそうだ。

同校の授業はほとんどが講義。予算が少ないため、CAD に触れるのもごく短期間で、機械工学の授業で基礎を教える程度らしい。同校では3年の過程を終える前の3ヶ月間、企業のインターンとして研修を受け、レポートを提出して卒業する。3年間で、その程度しか実技がない。

また、DRRD のエンジニアから、もし卒業後、関心があれば DRRD に連絡するようと言葉をかけてもらい、連絡先を教わったそうだ。しかし、DRRD に就職した学生はいないらしい。

同校だけでなく、ミャンマーの教育機関に就職課などなく、学生たちの就職先までフォローできていないのが現状だ。近年、同校では企業合同説明会を始めたそうで、このような機会も増やしていきたいと考えているそうだ。

ちなみに同校卒業生の10%が技術大学(TU)に進学する。進学しない卒業生たちは地元に戻ってしまうため、連絡が途絶えてしまうそうだ。もう少し深く聞いてみると、連絡がつかなくなる理由が分かった。都会の高等技術専門学校(GTI)だと入学希望者が多いため、入学試験の点数が足りないと感じる学生は、町から離れた場所にある同校なら人気がないだろうと考え、地元から離れているが入学申請をするのだそう。そういった理由で入学希望者が殺到し、新入生240名の枠に600人以上が申請し、300人以上が入学できないのだった。不便な立地条件ゆえに同校は人気校となり、全国各地から学生が集まっている。卒業後、地元に戻る学生が多く、その後連絡が取れなくなっているという訳なのだった。

では連絡がとれる卒業生はどうかと聞くと、先生が就職先は決まったか聞いても、給料の安いところだと恥ずかしがって、まだみつかってないと答えてしまうらしい。政府関係でも民間でも、建設関連の仕事を得るにはツテのある人が優先されるそうだ。

学長は沈下橋の存在を同校でのワークショップ開催まで知らなかったそうだ。ミャンマーの現状に則した素晴らしい技術の橋だと思うと別れ際に述べていた。



(右から)学長の Dr. Kyaw San Win と教師の Daw Hnin Ei Phyo、  
Dae Khin San New、Daw Soe Moe San